

百五歳

105歳

荒木又吉さん

明治40年9月21日生(西暦1907年)
住所/深見町



来月、106歳？ まだまだまだ元気やわいね！

「あまり歳をとり過ぎても自慢にならない」と話を切り出す荒木さん。

荒木さんと私(広報担当者・高木)との出会いは2年前にさかのぼる。「田鶴浜の深見町にすごいおじいちゃんがいるよ。取材してみても」という市民からの情報からだった。

当時、104歳だった荒木さん。自らエンジンをかけ、エンジン式草刈機で庭の草刈りをする姿を見て、私はびっくり仰天。聞いた年齢を疑った。

今回、取材したのは記録的猛烈な暑さだった8月中旬。「日中の外出は控えている。けど、朝夕の涼しいときには、片道1キロメートルくらいある向かいの山まで散歩に出かけるよ」と、来月106歳の誕生日を迎える今でも、2年前と変わらない生活をしている。体のバロメーターは、毎日欠か

さないお経を唱えること。家族は「毎日、お経の声の大きさと、その日の調子がわかるんです。調子がいい日は、隣の部屋にいても聞こえてくるくらいなんですよ」と話す。荒木さんも「毎日お経を唱えないと駄目なんや。調子が悪いときに声が出なくても、続けるようにしてる」と毎日の心掛けが大事であることを話す。

そして、生まれ育った田鶴浜金ヶ崎地区の移り変わりなども話してくれた。

「戦争が終わってかかってたころやったかな。当時、金ヶ崎は村やったんや。その金ヶ崎村役場に就職して、村のためにいろいろしてきた。戦争中は、みかんが配給されたことがあった。世帯当たり3つしか当たらなく、配るのが大変だった。あと、昔の金ヶ崎に流れる川はきれいだった。川から水を汲んできて、お

風呂や洗濯などに使っていた。食事関係だけ井戸水を使っていたけど、川の水は飲めるくらいきれいな川やった」

荒木さんは耳が遠くなったものの、目や言葉はしっかりしている。また、一番しっかりしているのは記憶力。昔話になると話が止まらないくらい、たくさんのお話を話してくれる。

9月に106歳を迎える感想を聞くと、「病院には何十年も行ったことがないし、痛いところや不自由なところもない。まだまだ元気やわいね」と力強い言葉が返ってきた。家族からも「おじいちゃん、食欲旺盛。夜、お腹がすくと、冷蔵庫からスイカを出してきて、一人で食べてるんやよ。家族もびっくりしたわ」と裏話を話してくれ、荒木さんは苦笑い。御茶目な一面もぞかせた。

最後に「不便なところであつても、生まれ育ったところが一番や。皆さん、故郷七尾が一番やよ」と市民の皆さんへのメッセージもいただいた。

市民の皆さん、荒木さんをはじめ、この特集で掲載した大先輩の皆さんを見て、私たちががんばらないといけませんね。



自らエンジンをかけ草刈りをする荒木さん(2年前)



金ヶ崎小学校・大正9年3月卒業当時